ヘクター・ドイルvs宮本武蔵

かてさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

烈海王が死んだ。その敵を討つために一人の死刑囚が動きだした。

目　次

二度目の脱獄 …… 1

二度目の脱獄

烈海王が死んだ。これには日本の格闘士達を震撼させた。そして、震撼させたのは日本だけにどどまらず、中国、米国、そして英国にも。

イギリス　カリオス刑務所　ここには最凶死刑囚であるヘクター・ドイルが収監されている。

９７…９８…９９…ドイルは正拳を行っていた。勝己から教わったたった一つの技（繋がり）ドイルは約束を守っていた。視力を失い得た力、更には自ら鼓膜を破壊。それによって得た敏感な皮膚。全ては強くなるため。

ドイルはベッドに入り眠りに着いた。何時でも脱獄は可能。それくらいの力を彼は手に入れていた。しかし、彼はその時が来るまでここから出ようとはしなかった。

早朝　全身が、否、細胞が感じ取った。思わず起き上がる。なにかが起きた。謎の不安感。これは…自分自身のものでは無い。そう気がついた。

カツ、カツ、カツ…

看守が歩いている音が聞こえた。

「なあ、」

「どうしたんだね？ドイル君？」

毎日行ってきた正拳突きが看守の顔面に叩き込まれた。

行かせてもらう東京に

「こんな無茶振りはもうこれまでにして欲しいな」

空軍の飛行場でストライダムはそう言った。

「日本で何かあったか？」

「ビッグニュースが２つ。ムサシ　ミヤモトがクローンにより復活したこと。そして烈が殺された。ムサシに」

「本当か？」

「ああ。君を倒した彼だがムサシには勝てなかった」

「…仇は私が討つ」

「…そういえば鼓膜を破ったと聞いていたが…」

「数ヶ月もすれば自然に治る。失いたくなったときにまた破れば良い」
「…体内の武器はどうなっている？」
「逮捕されたときに外されたがスプリングだけは残ってる。もっとも私には必要ないがね」
「…獅子とトンボの戦いだな」
「御老公大変です。武蔵と試合したいという者が海外から来てまして」
「だれじゃ？その者は強いのか？」
「そ、それが…」
「ッ…！ヘクター・ドイルじゃと!!!」
　神心会本部
　ドイルは愚地克巳と再会した。
「久しぶりだな。」
「ああ。セイケン毎日１００回やってるよ」
「で、わざわざ脱獄して何しに来たんだ？」
「敵討ち。それだけで充分だ」
「やれるかどうか」
「ルールは問題ではない」
「そうだよな。死刑囚だもんな。手段は選ばなくていい。まあ、こんな話するよりも鍛えたんだろ？やるかい？組み手」
「ああ」
「待ってくれ」
　鎬昂昇が遮るように話し込んだ。
「君は…空手家の」
　ドイルは驚いた声で話した。
「君に破れたことに恨んではいない。しかし、我々を差し置いて武蔵と戦うことは許さない。君では無理だ」
　昂昇は構えて言った。
「つまり戦…」
　ドイルが言いかけたその時右の手刀がドイルの左腕を襲った。